

買うことになりました。

村中の人荷車を持ち寄り、牛に引っ張らせて柱や木材を積んで帰って来ました。

その家は当時の値段で3千円でしたが、正月には入れるように建ててもらうことができました。

8月15日の終戦の日は、焼けてラジオはなかったが、生田さんが持っておられたので聞かせてもらいました。

天皇陛下の玉音放送と言っても、当時は天皇陛下の声も聞いたこともなく、みんな直立不動の姿勢で聞いていました。

これで戦争は終わったのか、とみんなワァワァ泣きました。

夫はビルマで戦死したので、子供を連れて実家に帰ることも考えましたが、私は長女なのでいつまでも世話になっていられない、と思い、舅姑さんはいい方だったので、嫁ぎ先で辛抱することにしました。

それにしても2人の子供を戦地に送ったおじいさん、おばあさんはどんな思いだったでしょう。

帰還した弟さんはスマトラへ行って、2、3回葉書がきましたが、兄貴はビルマの部隊だから負けに行くようなもの、帰還は無理だろう、と言っていました。

私は夫に召集令状がきた時も、夫は帰って来るもの、戦死するとは思ってもみませんでした。

今この歳になるまで暮らしてきて、私はありがたいと思っていますが、わが子を戦地へ送る親の気持ちを考えると、どう言っているのかわかりません。

上から2番目の姉さんには男の子が4人いるので、娘に家を建ててやり、いとこ夫婦として男の子を1人貰いましたところ、戦死した夫の後は自分らで継ぐと言ってくれ、夫の33回忌、50回忌をつとめてくれました。

秦の実家の父は、お前の一家は夫は戦死、家は焼ける、お前の家1軒が戦争をしているようなもの、と言っていました。

子供を連れて里帰りし、百姓が忙しいから一晩だけで帰ると言うのと、家もないのに帰るのは可哀想な、と言ってくれました。

でも、婚家のおじいさん、おばあさんがいい人で実の親のように思って暮らしてきました。

あの時分の戦争のことを思えば、今の平和はいい。

戦争は二度と起こってほしくない。